様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：１４４０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１１２２

研究課題名（和文）現職教育にみる１９７０年以降の英国初等教育におけるリテラシー教授の研究

研究課題名（英文）A STUDY ON TEACHERS' EDUCATION FOR LITERACY IN ENGLISH PRIMARY SCHOOL SINCE 1970

研究代表者
松山　雅子（MATSUYAMA, MASAKO）

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：５０１７３９２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）： 40年に渡るイギリス初等教育における国語科教育改革の内実を、改革がもっともラディカルに現われる入門期（低学年）を中心に、国語科教育センターの手がけた実践的国語科教育研究の詳細を明らかにすることを通して一定程度捉え得た。特に観察評価法による教師の自己評価力の育成と読書力向上プロジェクトの内実と意義を詳細に論じた。
その成果は、『イギリス初等教育における国語科教育改革―Centre for Language/Literacy in Primary Educationの取り組みを中心に』と題した学位請求論文（広島大学大学院）に結実し、2015年3月、渓水社から刊行し、研究成果を公に還元した。

研究成果の概要（英文）：Thorough analysis and consideration was given to the teachers' education in language and literacy by the Centre for Literacy in Primary Education in London ,England for 40 years since 1970. Especially the Primary Language Record and the Power of Reading Project,both of which were developed and have been contributed effectively in teaching profession locally, nationally and on a global scale, were discussed in details and hopefully would give us effective viewpoints to our educational reform in Japanese language and literacy.The result was completed as a PhD.disertation and was published in March 2015.

研究分野：比較国語教育学

キーワード：現職教育　英国初等教育　CLPE　教科教育センター　観察記録法　読書力向上プロジェクト　英国国語科教育改革

１．研究開始当初の背景

藤原和好（2002）は『国語科教育学研究の成果と展望』（全国大学国語教育学会編、明治図書）で、比較国語教育にかかわる先行研究を６つのカテゴリーに分けて総括している。方法論、研究史、記述・解釈、摂取・交渉研究、対照研究、比較研究である。なかでも、そのほとんどが「外国の国語科教育を記述・解釈した」「記述・解釈」の段階のものだとする。

本研究も、この「記述・解釈」に属するといえるであろう。ある言語領域に限ったアプローチではなく、これまでわが国の比較国語教育学では本格的に取り上げられてこなかったイギリス初等教育における国語科教育の教師教育を、NC 制定、普及、推進と密接にかかわらせ、70 年代以降の 40 年間を史的に捉えようとした研究である。おのずと、本研究の研究対象は、NC という教育改革の制度化の側面と、その傘下で日々の教育をうけもつ現職者に対する教師教育という（つねに教育的効果を意識した）制度の具現化の側面となる。研究のねらいとしては、その両者を有機的に関連づけて統一的に論じるところにあった。

これまで、小中学校のある段階、ある学年、ある言語領域に限った史的研究や理論考察、実践研究において、さまざまに言及されてはきたが、カリキュラム論として、本格的にイギリスの NC を捉えようとした研究は発表されていない。けれども、カリキュラムや付随する公文書を丹念に見ただけでは捉えがたい特性があり、その十全な理解に至らない難しさがある。NC が制度として成立するための推進力となったものを明らかにしないかぎり、イギリスという国の教育改革のプロセスは解明できないのではないか。本研究は、そのための一つの条件を満足させるものである。

推進力となった教師教育機関に視座を置き、（教育改革をセンターから見ると、カリキュラム構想・企画段階、実態の把握、公文書として制度化、調査・開発研究とそれを踏まえた方法の提示と実地展開、結果としてのカリキュラム改訂、新たな調査・研究への着手などが連動した）40 年というスパンで、教育改革のまさに動いているさまを継続的に捉えようとした研究としては、初めてのものである。

こうした普及、推進に迫ることは、わが国の教育改革を再考するうえで貴重な観点を見出す一助となる。わが国の学習指導要領をいかに作成していくか、優れた成果が提案されたとき、いかに普及、浸透させるか、その手立ての必要条件を考えるうえで、イギリスの教育改革のありようは参考となるのではないかと考えた。

２．研究の目的

比較国語教育学研究の見地から、ナショナル・カリキュラム制定前から 2010 年までの約 40 年間のイギリス初等教育における国語科教育改革の内実を、国語科教師教育センター（CLPE）の取り組みの分析を通して具体的に明らかにし、わが国の教育改革推進への有効な示唆を得ることを目的とした。

教科教育の観点から、教育を改革する一つの姿として、その駆動力であり、推進力であった内ロンドンの初等教育国語科教育センターの取り組みを明らかにする意義を以下のように捉えた。いずれの文化における教育改革であっても、固有の歴史的経緯と社会文化状況に沿った営みが認められる。だが、センターの取り組みに、実態調査と実践理論に根ざした観点・方法および省察が不可分に相関する着実な教師教育システムが見出せるとき、文化を超えて、イギリス（イングランドとウェールズ）の教育改革の牽引力のひとつである教科教育センターから、われわれの学びうるものが見出せると考えた。

研究対象としては、小学校国語（英語）科教育センター（Centre for Language in Primary Education、以下 CLPE①）と、その発展形、小学校リテラシー教育センター（Centre for Literacy in Primary Education、以下 CLPE②）を取り上げた。CLPE①は、内ロンドン教育局（ILEA）傘下の教科教育センターとして 1970 年に設立され、ILEA 解体後、内ロンドンの Southwark borough 教育局の管轄下に移り、2003 年に独立採算制の教師教育機関 CLPE②へと組織替えを行い、今日まで 40 年余、国語科の教師教育に貢献してきた。教科教育センターは、政権政党によって揺れ動く文教政策に翻弄されない教師の主体性が、改革の担い手としての必須だと考え、教師の自律性の育成に力を注ぎ、確実に効果をあげてきた。ロンドンを中心としながら、全国区ならびに国際的に影響力をもちえたセンターの取り組みを、イギリスの実践的国語科教育の改革の研究の具現者として捉えようとしたものである。

３．研究の方法

具体的な研究方法は、以下のとおりである。主な考察資料として、教育改革の道程にそって実施された調査・開発研究にもとづく①センター出版物（*The Primary Language Record: Handbook for teachers*（1988）、*The Reading Book*（1996）他）／②機関誌 *Language Matters*（1975-2002）／③現職研修プログラムの実際、プロジェクトにかかわる web 情報、実地指導他における児童の学習記録を取りあげ、考察した。合わせて、随時、各種公文書を含む関連資料に寄りながら、文献調査を第一義とした。地方教育委員会等の公文書等、わが国で入手困難な資料は、ロンドン大学教育研究所附属図書館で可能な限り原資料に当たるこ

とを心がけた。加えて、実地検証の機会を設け、教師教育の実践理論と実地を関係づけた総合的探求をめざした。

実地検証は、①関係者（センター長、プロジェクト主任、国語教育学研究者他）へのインタビュー調査（2008 年、2010 年、2012 年）、②現職研修プログラム（読書力向上プロジェクト通年研修の前半部、国語科主事養成コース他）への参加（2010 年、2012 年）、③センター指導校（1 年、4 年、6 年）への授業参観（2010 年、2012 年）、④研修参加者（内ロンドン研修／ケンブリッジ研修の計 68 名）対象のアンケート調査（2012 年）の 4 方向から行った。以上を踏まえ、センターの教師教育観、教材観、授業観、評価観を総合的に探求し、教育改革の内実の解明を試みた。

４．研究成果

本研究は、教科教育の観点から、教育を改革する一つの姿として、その駆動力であり、推進力であった内ロンドンの教科教育センターCLPE①②の取り組みを明らかにした。具体的には、①実態調査、②実験授業、③授業のモデル化、④教材と学習指導方法の実践的開発と普及等を具体的な手掛かりとして、40 年余にわたるセンターの教師教育に見出せる内側からの教育改革の実の姿を考究した。

CLPE①②がめざした教育改革の基本的特徴を以下に総括したい。

（１） 調査・観察と授業構想の連携は、センターの組織的探求の基本姿勢である。

教師による日常的児童観察記録の有効性を支えるためにセンターが構築した場は、以下のようである。実態把握→原案の開発→ケーススタディ（実態調査）→原案の修正・再考→パイロット実践（実態調査）→共同研究を軸とする研修（実態調査研究）→原案の再検討→モデル化→推進のための現職研修→実地指導（実態調査）とモデレーションの運営推進 →モデルの改善、といった一連の活動の連鎖、連動である。このセンターの組織的探求の基本姿勢が、教師教育環境そのものといってよい。これら矢印は、多様な質と量のオーバーラップを必然的に伴う複線型の営みと読み替えられる。これが、センターの国語科教育の改革の研究の姿である。

（２） 実践現場の状況に応じた教育効果をあげる教師の専門的力量の向上が、センターの教育改革の基盤である。

センターは、観察記録法を開発し、教師の自己評価力の育成をその根幹に据えた。自己評価力を身に着けた教師が、センターとともに、より実践的な教育効果につながる授業研究プログラムの開発に参与し、実の場で試行を重ねたのが、つぎの段階である。練り上げられた授業研究プログラムが個別の学習状況に適応し実をあげていくために、読書力向上プロジェクトが企画、運営される。本論は、この基礎の確立、それにもとづく調査、試行、そして最後の応用の 3 段階を、「生成期」「拡張期」「充実期」と捉え、センターの 40 年余の教師教育に具現化された教育改革の道程を跡付けた。専門的力量に支えられ自律した教師の育成にむけた道程でもある。

とりわけ、充実期の読書力向上プロジェクトが、一定のフレームはあるものの、固定プログラムではないプロジェクトの形であるところに、内側からの教育改革の価値を見出すものである。通年のプロジェクトの最終回は、参加教師全員の実践報告発表で締めくくられる。自らの実践の最終自己評価の場が、プロジェクトの一つの終わりであり、新たな教師自らのプロジェクト構想の始まりとして位置付けられる。公の教育改革が実践の場において実をあげるべく、縁の下の力持ちの役割を担ってきた CLPE①②の教師教育観の根幹を、そこに見出した。

（３） 戦略的な教育改革運動の一環として、明確に文学を取り上げ、文学を共有しうる自律した読み手を育むリテラシーの学習指導を提唱した。教材としてのコアブック・コレクションの編纂・提唱と読書人としての教師の育成を、文学を共有する学びの場の十分条件に置いた。

多言語文化ロンドンに位置する CLPE は、誰もが英語に触れられる抵抗感の少ない入口として文学を明確にリテラシー教授のただなかに位置づけた。NC では、文学と情報テクスト双方を学習対象とし、両者の表現形態としてマルチメディアも視野に入っていた。センターは、国語科カリキュラム作成に有効なジャンルを特化する意味で、戦略的教育改革のあり方として文学に絞り込む。

文学の共有を図るための環境づくりの要であり、プロジェクトのリテラシー教授の骨子を支えるのが、コアブック・コレクションの編纂と活用の提唱である。読書力向上プロジ

ェクトでは、本を読むことが日常的に保障された学習経験があり、その経験の発展の手掛かりとして、個々の読み手にとって方略の学びが意味をもつ。文学の読みの経験が児童にとって価値をもつとき、読みの方略は、かれらの必然になるという教育観である。

センターの意図は、つまるところ、教育改革の担い手をいかに育てるかにあった。政権政党が変われば、文教政策が 180 度変化することもめずらしくないイギリスにあって、文教政策がどのように揺れても、それに翻弄されない教師作りがめざされたのである。教育改革を作り上げていこうとする、センターの強い意志の具現化に他ならない。

このセンターの確固たる教師像は、理論的基盤の生成期から明確であった。70 年代下半期には、*Bullock Report*（1975）の提言を受けて、教師による児童の読書実態の把握や児童反応をもとにした児童文学の価値づけ、それらを踏まえた読書環境の構築が、研修や実地指導を通して推進される。既成の図書リストに頼るのではなく、児童がどのように反応し、なにに反応しない作品なのかを、教師が説明できることに重きが置かれた。当時のセンター長 McKenzie が牽引した、教師による継続的な観察記録が息づく学級風土作りは、観察記録法の開発の有効な土壌となった。児童の既存の理解に基づき学習を組み立てる構成主義に立つ日常的な評価システムの開発は、日々の学習指導の企画・運営・批正の担い手としての教師作りと表裏一体をなしている。

観察記録法が、学級の＜今日＞を捉え、振り返る観点であり方法ならば、第 3 章で取り上げた文学を核とするリテラシー教授モデル（1966）の考案と検証は、教師にとって学級の＜明日＞を見通す見取り図の提案を意味していた。児童文学を軸に編まれた教授プログラムは、一連の学習指導展開を見通させ、かつ意図を明確にする。指導の意図がつかめれば、授業は組み立てやすい。自律への道程を歩み始めた教師にプログラム・モデルを提供することで、明確な指導意図に沿った、より分析的な児童把握や指導実態の省察を促す契機ともなる。自分育ての渦中にある教師に対し、わかりやすい学習指導の見取り図を提供することで、教育改革の担い手を実働的に育てていこうとしたのである。

学習指導のプログラム・モデル、授業における学習指導過程の実際、観察記録法による日常的な評価、これらが組み合わさり、教師の主体性によって実情に合わせた柔軟な適応力がめざされたのが、読書力向上プロジェクトであった。自分の学習指導のプロセスを自らが認定していく教師像の具現化をめざした取り組みに他ならない。

このように設立当初から 2000 年代に至る 40 年余のセンターの教師教育において、教育改革の担い手作りへの強固な意志と具現化へのたゆまぬ努力は、一貫して揺らぐことはない。本研究で取り上げた取り組みは、センターの教育改革実施案作りの道程とも読み替えることができる。実践的国語科教育の改革の研究と位置づけるゆえんである。

以上に総括しえた 40 年に渡るイギリス初等教育における国語科教育改革の内実を、改革がもっともラディカルに現われる入門期（低学年）を中心に、国語科教育センター（CLPE）の手がけた実践的国語科教育研究の詳細を明らかにすることを通して一定程度捉え得たと考える。その成果は、『イギリス初等教育における国語科教育改革－Centre for Language/Literacy in Primary Education の取り組みを中心に』と題した学位請求論文（広島大学大学院）に結実し、2015 年 3 月、渓水社から単行本として刊行し、研究成果を公に還元した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４　件）

①松山雅子：伝統文学を軸にしたリテラシーの教授 -Centre for Literacy in Primary Education の読書力向上プロジェクトの試み『学大国文』大阪教育大学国語教育講座・日本アジア言語文化講座編、(2014.10) pp.35-45

②松山雅子：言語力の育成をどうはかるか―文学を分かち合う場に参与する力の育み『実践国語研究』38 巻 6 号、明治図書（2014.10・11）pp.74-75

③松山雅子：言語力の育成をどうはかるか―物語文脈に分け入る力の育み、『実践国語研究』39 巻 1 号、明治図書（2015.12/1）pp.74-75

④松山雅子：言語力の育成をどうはかるか―読み拡げ深める思考のフレームとしての基礎・基本・応用の問い方、『実践国語研究』39 巻 2 号、明治図書（2015.2/3）pp.74-75

〔学会発表〕（計　0　件）

〔図書〕（計　１　件）

①松山雅子『イギリス初等教育における国語科教育改革の研究 - Centre for Language /Literacy in Primary Education の取り組みを中心に－』、渓水社　(2015.3.25)

〔産業財産権〕

○出願状況（計　0　件）

○取得状況（計　０　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
松山　雅子（　MATSUYAMA MASAKO　　）
大阪教育大学・教育学・教授
研究者番号：50173927

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：